

島根県邑智郡瑞穂町
ロクロ谷遺跡発掘調査概報



1990年

島根県邑智郡瑞穂町教育委員会

序

近時、生活環境の整備や道路交通網の整備等がすすめられる中で、埋蔵文化財の調査発掘は必要不可欠のものとなって参ります。

このたび、町道鱒淵馬の原線改良工事に伴い、通称ロクロ谷と称する周知遺跡の開発計画がなされ、試掘調査の結果詳細な発掘調査が必要との判断にいたりました。

調査に当っては島根県文化課指導のもと広島大学考古学研究室の潮見教授、河瀬先生、本町の吉川指導員等各先生方のお手をわざらわせましたが、その結果がまとまりましたので報告書を作成することにいたしました。

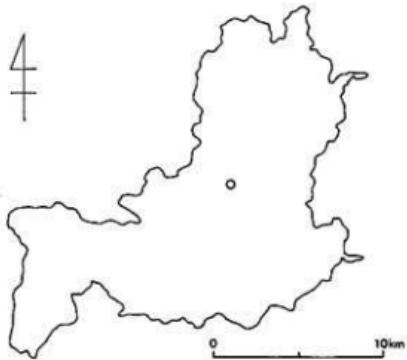
この冊子が、本町歴史をひもとく--助として活用されますと共に、文化財保護への理解を深めるための資料として広く活用されますことを希望します。

最後になりましたが、本調査実施及び報告書作成に当ってご協力をいただきました関係各位に対し厚くお礼を申し上げ序にかえる次第であります。

平成2年3月

瑞穂町教育委員会

教育長 澤田 隆之



瑞穂町域とロクロ谷遺跡位置図

島根県邑智郡瑞穂町

ロクロ谷遺跡発掘調査概報

目 次

序

I. 調査にいたる経緯	1 頁
II. ロクロ谷遺跡の位置と環境	4
III. 調査区の概要と出土遺物	9
1. 調査区の概要	9
2. 出土遺物	13
a. 縄文時代の遺物	13
b. 奈良～平安時代の遺物	14
IV. まとめ	19

図版・挿図 目次

図版第 1	a. ロクロ谷遺跡遠景	b. ロクロ谷遺跡近景
図版第 2	a. 調査区全景	b. 第 1 区西壁断面
図版第 3	a. 第 1 区南壁断面	b. 第 1 区北壁断面
図版第 4	a. 第 2 区西壁断面	b. 第 2 区北壁断面
図版第 5	a. 第 4 区西壁断面	b. 第 4 区北壁断面
図版第 6	a. 第 5 区西壁断面	b. 第 5 区北壁断面
図版第 7	a. 縄文土器	b. 磨石
図版第 8	a. 土師器（外面）	b. 土師器（内面）
図版第 9	須恵器(1)	
図版第 10	須恵器(2)	
図版第 11	須恵器(3)	

第1図 第1試掘区平面図及び西壁土層断面図	1頁
第2図 第2試掘区西壁土層断面図	2
第3図 ロクロ谷遺跡周辺遺跡分布図	5
第4図 ロクロ谷遺跡付近地形図	9
第5図 ロクロ谷遺跡調査区土層断面図	10
第6図 ロクロ谷遺跡調査後地形図	11
第7図 ロクロ谷遺跡出土縄文土器・石器実測図	13
第8図 ロクロ谷遺跡出土土師器実測図	14
第9図 ロクロ谷遺跡出土須恵器実測図（1）	16
第10図 ロクロ谷遺跡出土須恵器実測図（2）	17

凡　例

1. 本概報は、1989年(平成元)10月に実施したロクロ谷遺跡の発掘調査概要である。
2. 調査は、瑞穂町教育委員会が実施主体となり、広島大学文学部の河瀬正利に調査を依頼して、実施した。
3. 本書の執筆・編集は、河瀬が担当した。なお、遺物の整理、復元、実測には広島大学埋蔵文化財調査室の吉井宣子、池川京子氏並びに広島大学考古学教室の学生諸君の協力を受けた。
4. 調査に先立つ基準点測量は、測地技建（K K）に依頼した。

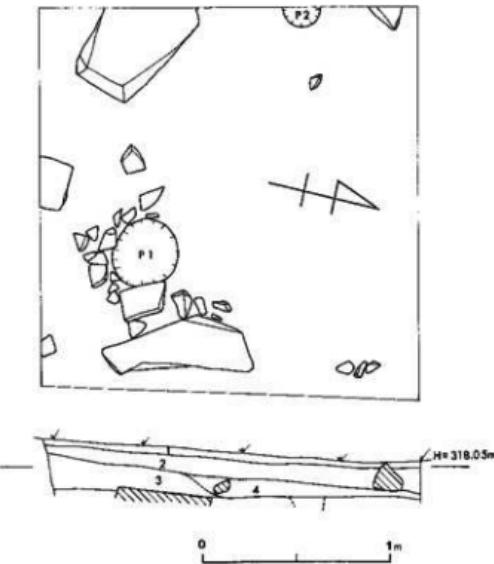
I. 調査にいたる経緯

今回発掘調査を行ったロクロ谷遺跡は、島根県邑智郡瑞穂町大字鱒瀬字馬野原上に所在する。現地は、鱒瀬から馬野原へぬける町道の出羽峠を越え、馬野原側へ300mほど下ったところに位置する。瑞穂町役場からは北へ約1.5kmの地点である。昭和45年（1960）ごろに行われた町道の改良工事の際に、削平された道路の崖面から上飾器、須恵器片などが採集され、遺跡の所在が確認されたのである。

この町道鱒瀬馬野原線は、馬野原側ではきわめて勾配が急で、冬季には、積雪、凍結のため通行が途絶えることもしばしばで、この道路の改良は町民の長い間の要望であった。こうした事情を勘案し、瑞穂町は昭和63年になって大幅な道路改良事業を実施することを計画した。計画によると平成元年度事業として勾配とカーブの急な遺跡付近の道を出羽峠付近から大きく迂回させ、遺跡の西側部分を通過して馬野原へ至る道路を新設するというものであった。ロクロ谷遺跡

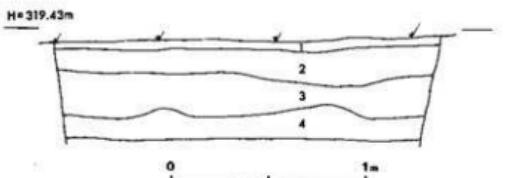
の範囲については明らかでなかったが、現道の西側には丘陵先端部に小規模な平坦部が形成されており、遺物の散布が想定される状況であった。

町土木課からこの遺跡の取扱いについて協議をうけた町教育委員会は、遺跡の発見者である吉川正氏（町文化財保護委員）に道路予定地内の遺構、遺物包含層の有無を確認するための試掘調査を依頼した。試掘調査は、昭和63年11月に道路建設予定の丘陵据の平坦部に試掘区（ $2 \times 2\text{ m}$ ）2か所を設定して行われている。



第1図 第1試掘区平面図及び西壁土層断面図

吉川氏の略報によると第1区では表上層の下の黒褐色土の上面から掘りこまれた柱穴状の落ちこみを2か所検出し、土師器、須恵器、焼土塊、黒曜石片などを発見している（第1図）。ま



第2図 第2試掘区西壁土層断面図
(1. 表土 2. 明褐色土層 3. 明褐色土層(礫を含む)
4. 黒褐色土層)

た、第2区では、第1層—表土、第2層—明褐色土、第3層—礫を含む明褐色土、第4層—黒褐色土と堆積しており、第3層、第4層を中心にも須恵器、土師器が出土したという（第2図）。須恵器のほとんどは細片となっているが、久永古窯跡群で製作された須恵器の中では最も新しい時期のもので奈良時代と推定している。そして、道路の建設予定地にも遺物包含層が広がっており、住居跡などの存在する可能性が高いと結論づけており道路建設に先立って本調査が必要であると報告している^[1]。

この試掘調査の結果をうけて、町教育委員会は、島根県教育委員会文化課と遺跡の取扱い方法について協議を行ったが、道路改良事業は遺跡付近を除いてすでに工事が進行し、路線変更がきわめてむつかしい状況にあること、また、遺跡の規模、内容などがいまなお明らかでなかったことなどの事情から、発掘調査もやむをえないとの結論にいたったのである。

ところが、発掘調査を行うことにはなったが、まだ問題が残っていた。調査体制の組織化の問題である。町自体で調査体制を組織できる状況でなかったため、町教育委員会は、試掘調査を依頼した吉川氏に本調査についても再度依頼した。しかし、吉川氏からは、本務があり、長期にわたる調査は困難であり担当できないと断わられ、一方、県文化課から強い働きかけのあった埋蔵担当専門職員の町への配置も町財政などの事情から不首尾に終っていた。そこで対策に苦慮した町教育委員会は、瑞穂町高見の横道遺跡の調査（1982年）以来、町内の遺跡分布調査に調査指導を行ってきた筆者にロクロ谷遺跡の調査を依頼された。筆者としては、県文化課の指導や吉川氏の意向を重視し、町の文化財保護体制の確立が急務であること、また、日程的にも調査を承諾することは困難であることなどから固辞した。その後も再三、再四に及んで調査の依頼があった。そして、町としては町民の要望はあるけれども道路の改良工事を1年遅らせて平成2年度に行うこととしたので、何んとかそれまでに調査を引き受けたかったことであった。筆者としても対応に困った

が広島大学文学部潮見浩教授に相談し、指導と助言を受け、また、町へは今後の文化財保護体制の整備を強く要請して、この調査を承諾することにしたのである。

調査は、平成元年10月4日から31日までの28日間にわたり、つぎの体制で行った。

調査担当 河瀬正利（広島大学文学部講師）

調査補助 吉川 正（瑞穂町文化財保護審議委員）

調査指導 潮見 浩（広島大学文学部教授）

宮沢明久（島根県教育委員会文化課埋蔵第1係長）

内田律雄（島根県教育委員会文化課埋蔵第1係主事）

事務局 澤田隆之（瑞穂町教育委員会教育長）

井上 薫（瑞穂町教育委員会次長）

星野暢子（瑞穂町教育委員会次長補佐）

佐藤 勝（瑞穂町教育委員会次長補佐）

このほか調査にあたり、川原和人、卜部吉博、松本岩雄、三宅博士、角田徳幸、永瀬伸二（以上島根県文化課）、古瀬清秀、中越利夫、竹広文明、村上恭通、佐野元（以上広島大学）、野田昭三、竹内善人、日高享三、高川秀夫、生田忠徳、中本惇、竹内静人、竹内貞子、品川コミツ、三上キミコ、服部昭子、松島年春、竹内我孫子、日高イツヨ、品川ヨシエ、片岡ユキヨ、高川昭二、谷 嶽、竹添繁人、洲濱單太郎、和田正介（以上発掘作業員）、三上憲昭、小笠原義宣、小林博俊、日高学、森岡弘典（以上瑞穂町）の各氏のご指導とご協力を得た。

注

(1) 吉川正『ロクロ谷遺跡試掘調査報告書』瑞穂町教育委員会 1987年。

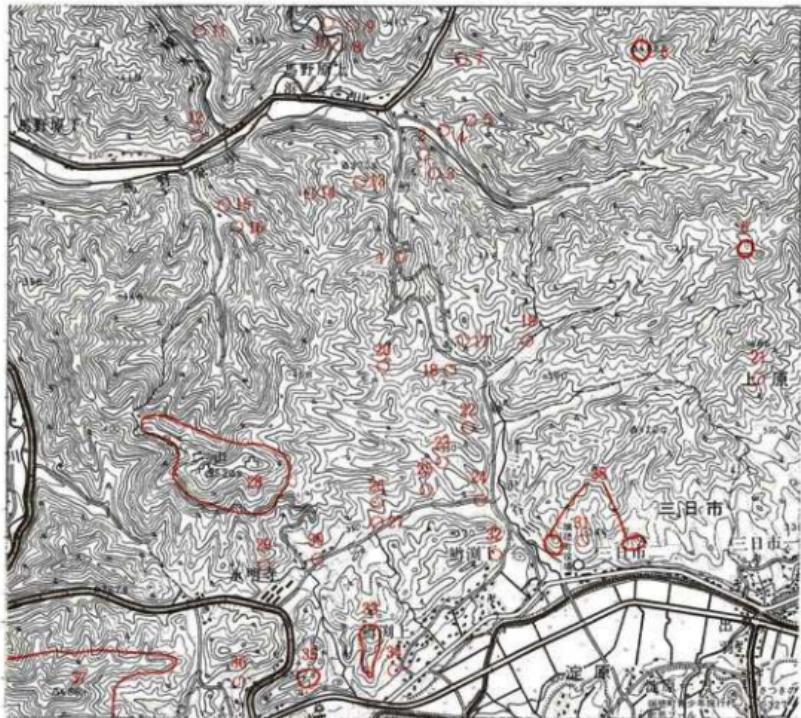
II. ロクロ谷遺跡の位置と環境

島根県邑智郡瑞穂町は、島根県のはば中央部の邑智郡の南部に位置する。南西には標高600～800mの中国脊梁山地が連なり、山地を境として広島県と接している。町域のはば中央を出羽川が東流し、この出羽川に向って亀谷川、岩屋川、円の坂川などの支流が注いでいる。出羽川とその支流の流域には、沖積地や河岸段丘が形成されており、とくに瑞穂町田所から出羽にかけてはかなり広い出羽盆地が発達している。ロクロ谷遺跡は、出羽盆地の中央に位置する三日市から北の馬野原へはば南北に繋がる町道跨瀬馬野原線に沿って位置している。町道の出羽峠を越えて馬野原側へ約300m下ったところのロクロ谷と呼ばれる小さな谷の谷尻部に所在する。標高は約320m、遺跡前面を南から北へ流れる小川からの比高は約10mである。

瑞穂町内の遺跡は、「全国遺跡地図（島根県）」や「瑞穂町誌」によれば約100か所が記載されているが、近年実施されている町内の遺跡分布調査によると、その数は激増しており約450か所にのぼるとみられる。⁽¹⁾ その多くは近世以降の製鉄関係の遺跡であるが、時代的には旧石器時代からのものが含まれている。⁽²⁾

旧石器時代の遺跡では、横道遺跡（高見）⁽⁴⁾ や荒横遺跡（岩屋）⁽⁵⁾ があげられる。また、近年調査された堀田上遺跡（市木）⁽⁶⁾ でも旧石器時代とみられる石器がみつかっている。横道遺跡は、出羽川ぞいの低丘陵上に位置する。1982年の詳細分布調査によって、丘陵頂部において始良Tn火山灰の下から流紋岩製の石核、剥片類が出土している。遺構などは明らかでないが、後期旧石器時代前半の石器群が存在するものとおもわれる。荒横遺跡では安山岩製の尖頭器状石器と削器が採集されている。前者はナイフ形石器かとされていたものであるが断面は台形で側縁部には鋭利さがみられず、また、先端部が尖っていることから尖頭器状石器と考えた方がよい。中国横断道建設に先立って調査された堀田上遺跡でも旧石器時代と推定される台形様石器が出土しているといわれる。⁽⁷⁾ このように瑞穂町ではいまのところ後期旧石器時代（約2万年前）ごろから人々が生活を営みはじめたと考えることができる。

近年中国山地周辺の調査では、時代を決める大きな手懸りとなる火山灰層が検出される例が多くなってきた。火山灰層の堆積状況も良好であり、今後調査が進展すれば旧石器時代の人々の生活や文化がだいに明らかになってくるものと期待される。



第3図 ロクロ谷遺跡周辺の遺跡分布図 (1 : 25000)

- | | | |
|--------------|-------------|------------|
| 1. ロクロ谷遺跡 | 14. 矢ヶ谷窯跡 | 27. 清水ヶ尻遺跡 |
| 2. 道ヶ谷A窯跡 | 15. 後友新跡 | 28. 二ツ山城跡 |
| 3. 道ヶ谷B窯跡 | 16. 後友大鍛冶屋跡 | 29. 鉛迫鉋跡 |
| 4. 柄谷遺跡 | 17. 定入遺跡 | 30. 永明寺跡 |
| 5. 柄谷鉋跡 | 18. 定入窯跡 | 31. 石井迫窯跡 |
| 6. 宇山城跡 | 19. 上管窯跡 | 32. 原下遺跡 |
| 7. 鉛迫鉋跡 | 20. 桜ヶ谷窯跡 | 33. 御華山古墳群 |
| 8. 大鍛冶屋跡 | 21. 宇山窯跡 | 34. 竹前遺跡 |
| 9. 金蔵新跡 | 22. カニケ迫窯跡 | 35. 副城跡 |
| 10. 大鉛鉋跡 | 23. 馬場ヶ谷窯跡 | 36. 増屋横穴 |
| 11. 小緩木中鉛跡 | 24. 馬場ヶ谷A遺跡 | 37. 本城城跡 |
| 12. 中馬の原遺跡 | 25. 馬場ヶ谷B遺跡 | 38. 淀田古墳群 |
| 13. コオギヤスミ窯跡 | 26. 清水ヶ尻窯跡 | |

つぎの縄文時代の遺跡には、横道遺跡、長尾原遺跡（下龜谷）、人畠遺跡（大草）、大字根遺跡（伏谷）、郷路橋遺跡（市木）、堀田上遺跡などがある。横道遺跡では縄文早期の押型文土器、纖維土器、縄文前期の刺突文、条痕文土器や石錐、スクレーパーなどが出土している。⁽⁸⁾また、長尾原遺跡からは縄文早期の楕円押型文土器がみつかっている。⁽⁹⁾人畠遺跡、大字根遺跡からも縄文土器が出土しているが、詳細については明らかでない。なお郷路橋遺跡、堀田上遺跡は、中国横断道の建設に伴って調査されており、郷路橋遺跡では縄文早期、前期、後期、晚期の土器、石器や晚期の住居跡と考えられるビット群が検出されている。⁽¹⁰⁾また、堀田上遺跡は、丘陵の南側緩斜面から縄文早期の住居跡2軒や押型文土器、石錐、磨石、凹み石、石皿などがみつかっている。住居跡は土層から前後の関係が明らかとなっている。押型文土器にはネガティブ（陰刻）文様のほどこされた占い型式のものが含まれている。県内では最初の住居跡とネガティブ押型文土器の発見例となった。このように近年の調査では縄文時代早期～前期の貴重な遺構、遺物の発見が相次いでいる。縄文時代になると町内の各地で人々が生活はじめたことが窺われる。

弥生時代の遺跡には、牛塚原遺跡（上龜谷）、淀原遺跡（淀原）、順庵原A遺跡（下龜谷）、順庵原墳墓群（下龜谷）、長尾原遺跡、石堂遺跡（和田）賀茂山遺跡（高見）、段の原A遺跡（高見）などが知られている。弥生時代前半の遺跡としては牛塚原遺跡、順庵原A遺跡、淀原遺跡がある。これらの遺跡は、出羽盆地の南側丘陵上に位置しており、弥生時代の農耕生活が、沖積地をのぞむ湧水地点にちかいところから始まったことを示しているといえる。弥生時代の後半になると遺跡はしだいに増加し、出羽川流域の各地に分布するようになる。そして弥生時代の終わりごろになると農耕社会の進展とともに階層分化が始まった結果、共同体の首長墓としての墳墓が出現していく。順庵原墳墓群の1号墓は出羽川右岸の丘陵上に築かれた $10m \times 8m$ の規模をもつ四隅突出型墳丘墓である。墳丘上には箱形石棺墓2基、木棺墓1基の3つの主体がつくられており、主体内部や墳丘周囲の溝からガラス小玉、弥生土器などが出土している。墳丘裾には貼石がめぐらされ、周溝内にはストーン・サークル状遺構もみられる。⁽¹¹⁾また、御華山墳墓は、長さ $2.8m$ 、幅 $1.5m$ の墓坑の中に箱形石棺が築かれており、人骨や弥生土器が出土している。⁽¹²⁾いずれも弥生時代終末期から古墳時代初頭の墳墓と推定されるが、墳墓の形態、出土遺物からみて出羽盆地を生活の基盤とした集落の首長の墳墓と想定される。

古墳時代になると遺跡はさらに増えてくる。集落関係の遺跡には、長尾原遺跡、順庵原B遺跡、宇山遺跡（第3図21）、倉谷遺跡（高見）、狼原遺跡（和田）今佐屋山遺跡（市

木)などがある。長尾原遺跡では竪穴住居跡、土坑墓などが発見されており、また、製鉄に関係する鍛冶遺構も検出されている。竪穴住居は、一辺3~4mの隅丸方形の平面で壁にはカマドが付いている。1989年に調査された今佐屋山遺跡からも古墳時代後半の竪穴住居跡3軒と製鉄遺構1基がみつかっている。竪穴住居は、いずれも方形で壁の一辺にはカマドが付設されている。¹²つくりつけのカマドのある住居は、いまのところ出雲部では発見例がなく、石見部の特色かとされる。製鉄炉跡は、1号竪穴住居跡の少し上手にあり、炉床部と土坑とからなる。遺構の検出状況や炉内残留滓から炉形は隅丸長方形で規模は長さ45cm、幅38cmの小型の箱形炉と推定されている。

古墳は、約20基が確認されている。前半期の古墳と推定されるものは淀田古墳群(三日市)、御華山古墳群などがある。いずれも直径10m前後の円墳や方墳で、なかには墳丘をもたないものも存在するという。¹³小形の竪穴式石室を内部構造とする段の原古墳(高見)も古墳時代前半期のものと推定される。古墳時代後半になると丘陵斜面に横穴式石室を内部埋葬施設とする直径10m前後の円墳が築かれている。牛塚原古墳群(上龜谷)、杉谷古墳群(下龜谷)、石堂峠古墳群(和田)、長尾原A古墳群(下龜谷)などがある。このほか、丘陵斜面に横から穴を掘りくぼめて墓室をつくった横穴墓もつくられてくる。

このほか、古墳時代後半から奈良~平安時代の須恵器の窯跡も数多く分布する。道ヶ谷A・B窯跡(第3図2、3)、コオギヤスミ窯跡(同13)、矢ヶ谷窯跡(14)、定入窯跡(18)、上菅窯跡(19)、桜ヶ谷窯跡(20)、宇山窯跡(21)など20基ちかくに及んでいる。久永古窯跡群と呼称されており、島根県有数の須恵器生産地であったのである。

歴史時代の遺跡としては、古代の須恵器窯跡のほか、中世の山城跡や近世の製鉄遺跡などがある。山城跡では鎌倉期に富永(出羽)氏が築城したとされる二ツ山城跡(同28)をはじめ、宇山城跡(6)、本城城跡(37)などがある。また、近世の製鉄関係遺跡では製錬場であるたら跡や砂鉄採取の鉄穴場跡、切羽跡などが数多く残っている。その数は、300か所以上に及ぶとみられる。近世には「出羽鋼」と呼ばれるような良質の鋼の產出地であったことが知られているが、遺跡の分布状況からみても製鉄が盛んに行われていたことがよくわかる。なお、今佐屋山遺跡のような古墳時代の製鉄炉から近世の人のがかりな床釣り施設(地下構造)を設けた製鉄炉への発展過程については、いまなお明確ではないが1989年に調査された下稻迫遺跡(上田所)や清造山遺跡¹⁴(上田所)などの炉床構造は、近世たらの床釣り構造の出現する前の遺構として貴重である。¹⁵

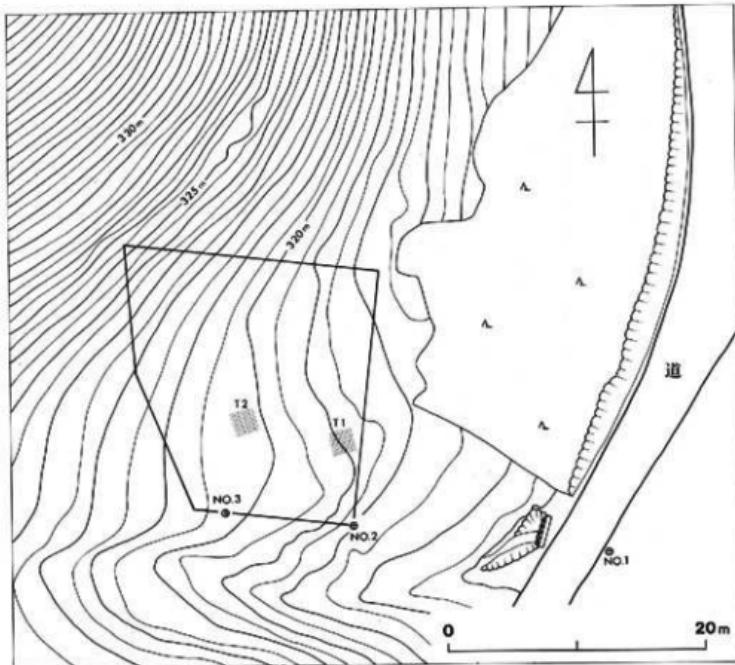
注

- (1) 文化庁監修『全国遺跡地図（島根県）』 1978年。
- (2) 瑞穂町『瑞穂町誌』第2集・第3集 1966、1976年。
- (3) ア、瑞穂町教育委員会『瑞穂町内遺跡分布図』 I、II 1985、1989年。
イ、吉川正氏のご教示による。
- (4) 河瀬正利編『横道遺跡—詳細分布調査報告書』島根県邑智郡瑞穂町教育委員会 1983年。
- (5) 吉川 正「瑞穂町の遺跡」『瑞穂町誌』第3集 1976年。
- (6) 島根県教育委員会『堀田上遺跡現地説明会資料』1989年。
- (7) 松本岩雄、角田徳幸、竹広文明氏のご教示による。
- (8) 前掲注(5)。
- (9) 島根県教育委員会『郷路橋遺跡現地説明会資料』 1988年。
- (10) 門脇俊彦「順庵原1号墳について」『島根県文化財調査報告』第7集、島根県教育委員会、1971年。
- (11) 前掲注(5)。
- (12) 角田徳幸「島根県今佐屋山遺跡の古墳時代製鉄遺構」『たたら研究』第30号、1989年。
- (13) 吉川 正氏のご教示による。
前掲注(3) ア、文献。
- (14) 広島大学考古学研究室、瑞穂町教育委員会『清造山製鉄遺跡現地説明会資料』 1989年。
- (15) 本章の内容は、前掲注(4)の遺跡の位置・環境（吉川正）によるところが多かった。

III. 調査区の概要と出土遺物

1. 調査区の概要（第4・5・6図）

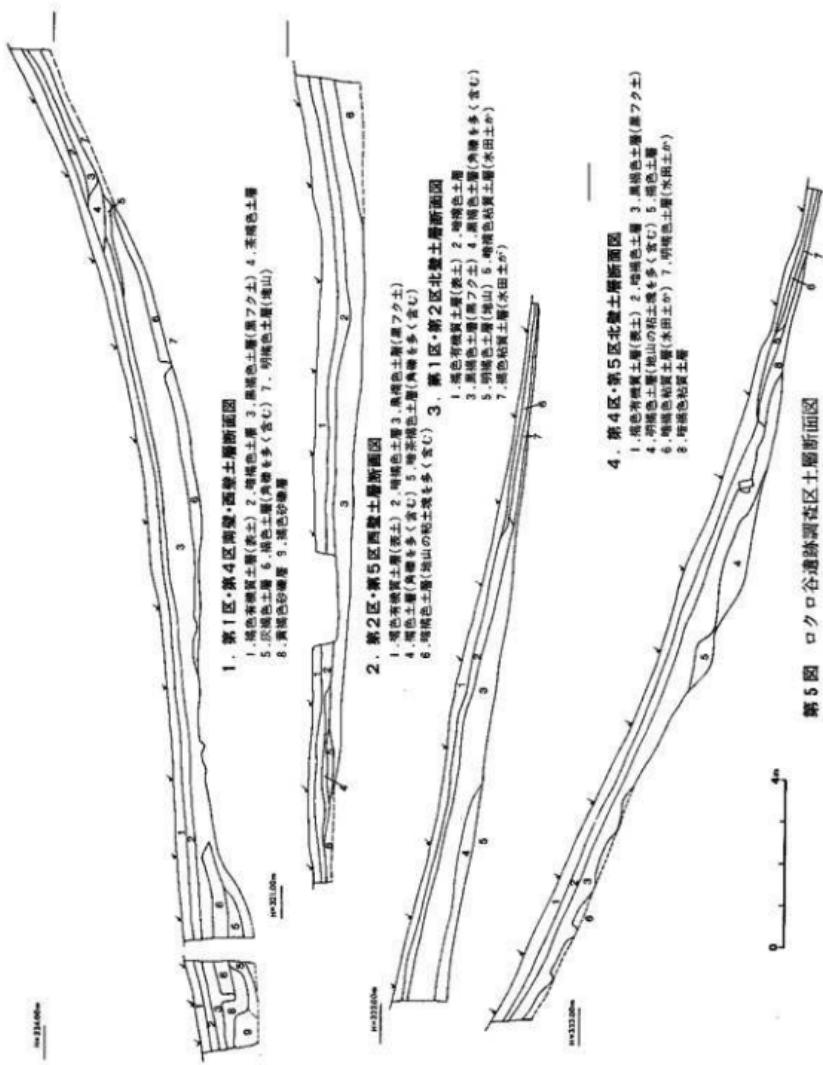
今回の調査は、現在の町道の西側で通称ロクロ谷と呼ばれる小さな谷の谷尻部の平坦部を対象として行った。付近の地形をみると、ロクロ谷の谷尻の北側には小さな平坦部がみられるが、この平坦部は西から東へのびる丘陵の裾部に形成されている。西から急傾斜で下る丘陵は標高約321m付近で傾斜を変換し、緩かな勾配となって東の小川に至っている。また、この平坦部は、標高318m付近を境にして2つの平坦部に分かれる。境には一部石

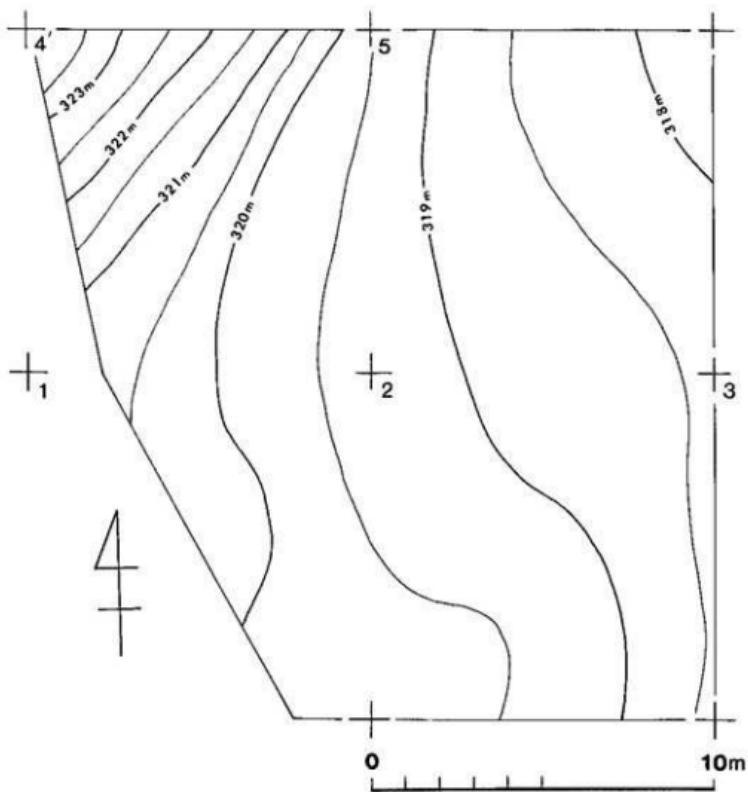


第4図 ロクロ谷遺跡付近地形図

(太実線内は調査区域、Tは試掘区、Noは基準杭)

No 1 :	(X = - 119760.00 Y = - 38240.00)
No 2 :	(X = - 119760.00 Y = - 38260.00)
No 3 :	(X = - 119760.00 Y = - 38270.00)





第6図 ロクロ谷遺跡調査後地形図（数字は調査区番号）

列がみられることから以前には畑地となっていた可能性もある。調査は、この2つの平坦部のうち上手の平坦部を対象とすることとしたが、遺構・遺物の出土状況をみて、場合によっては下手の平坦部についても調査を行うこととした。

まず、遺物包含層の広がりの想定される約500m²の範囲について測量基準点をもとに10m四方の5つの調査区（1～5区）を設定し、西側上手の第1区、第4区から調査を開始した。第1・4区では、表上の褐色有機質土（厚さ約20cm）の下に暗褐色土層（約20cm）、黒褐色土層（黒フク土30～60cm）、角礫を多量に含む褐色土層（20～30cm）、地山と続いている。第1区・第4区西壁の断面図（第5図1）をみると第1層と第2層は平均して堆

積しているが、第3層の黒褐色土層は第1区北半部から第4区南半部が厚くなっている。角礫を多く含む褐色土層（第5図1-6）も第1区北半から第4区南半が厚い。丘陵の上手から流出した土層であることを示す。また、第1区の南端よりでは地山が南へ傾斜して下降しており、谷のはじまりであることを示している。第3層の下に砂礫層が互層状に堆積している状況からみてロクロ谷の上流から流出した土層であるとみてよい。第1区南壁で柱穴状の落ちこみが観察されたが、砂礫層中であり、自然の営力によるものと考えるのが妥当であろう。第1区・第4区全域でも柱穴や土坑などの遺構はみとめられなかった。

遺物は、第2層に包含されているが、一部のものは第1層の表土中にも浮きあがっている。須恵器を主体として、少量の土師器を伴っている。いずれも破片となっており完形のものはみられない。また、第3層には遺物は含まれていない。第4区についてもほぼ同様であり、遺物は第2層を中心に一部第1層から出土している。

つぎに第2区と第5区の状況をみると、土層は第1・4区とほぼ同様の堆積状況を示しており、第1層（表土）の下に第2層（暗褐色土）、第3層（黒褐色土）と続き、その下には地山の粘土塊を多く含む暗褐色土と続いている。第2区の南よりは、谷にちかいことから第3層はしだいに薄くなり、角礫を多く含む褐色土（第5図2-4）や暗褐色土（第5図-5）が堆積している。ロクロ谷の谷尻部にあたるところであり、やはり谷からの流出土と考えられる。また、第2区北半から第5区南半部では第3層の黒褐色土が厚くなっている。先述した第1区と第4区の第3層の厚い部分と連がっている。第6図の調査後の地形図からも観察されるように第1区北端部から第5区東北隅へ走る浅い埋没谷が存在するようである。第2・5区においても遺構は検出されなかった。

なお、第2区と第5区の北壁断面（第5図3・4）をみると第2・5区東半部では漏水が激しく、しかも第1層の下に水田の耕作土や床土と考えられる暗褐色粘質土や褐色粘質土（第5図3-6・7、4-6・7）が堆積している。したがって第2区と第5区の東半部は以前に水田ないしは畑地として利用されていたと推定される。

第2・5区でも遺物は第2層を中心に須恵器、土師器が出土している。この区でも完器はみられない。第3層から須恵器、土師器が出土していないことも第1区・第4区と同様であるが、第5区中央部の埋没谷部分の第3層中からは縄文土器と磨石が出土している。出土状況からみて、上手からの流れ込みと考えられる。ロクロ谷の上手にキャンプサイトのような遺跡が存在するのかもしれない。

調査開始時には第2区と第5区の調査の状況によっては、第2区東側に設定した第3区

の調査を予定していたが、第2・5区の状況から判断して遺構・遺物が検出される可能性は少ないと判断され、また、現地形をみても地表に大・小の角礫が露出しており、谷からの堆積土であると考えられたので第3区の調査は行わないことにした。

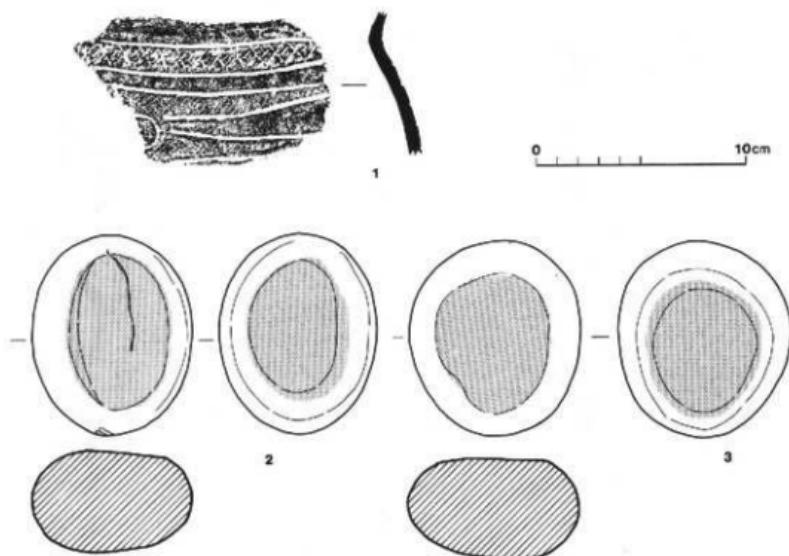
以上、今回のロクロ谷遺跡の調査の概要について述べてきた。須恵器や土師器がかなりの量出土したにもかかわらず遺構は検出されなかった。このため遺跡の性格については、明らかにできないが、出土土器に完器がみられず破片のみであり、なかに意図的に破碎されているものがあること、また、遺跡付近には多くの須恵器窯跡が分布していることなどから推測して谷の上手側に須恵器の窯跡やそれに関連する住居跡が存在するのかもしれない。

2. 出土遺物（第7～10図）

今回の調査で出土した遺物には、縄文時代の土器、石器、石屑のほか奈良～平安時代の須恵器、土師器がある。

a. 縄文時代の遺物

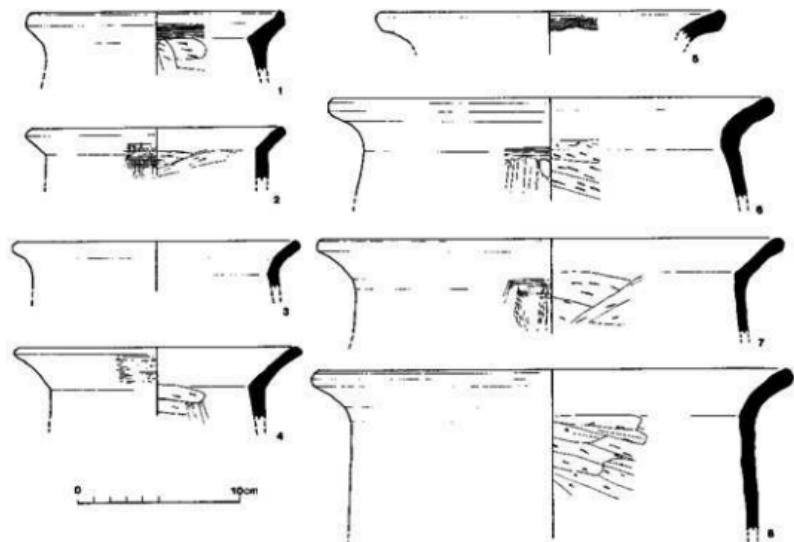
縄文土器（第7図1） 第5区北寄りの第3層中から出土したもので縄文後期の磨消縄



第7図 ロクロ谷遺跡出土縄文土器、石器実測図（アミ目は研磨痕）

文土器である。頸部のくびれた鉢形土器の頸部から胴部にかけての破片で、頸部の無文帶の下に横走する沈線がめぐらされ、沈線と沈線の間には貝殻による擬似繩文がほどこされている。頸部下の繩文帶には擬繩文の上に斜格子状の沈線がほどこされている。部分的に沈線が集約するところがあり、そこに渦文がほどこされるようである。器壁は薄く5mm前後で黒茶色を呈している。内面はヘラミガキによって平滑に仕上げられている。胎土には小砂粒を含んでおり、焼成はややあまい。器壁や文様の特徴から繩文後期後半の上器と推定される。

磨石（第7図2・3） いずれも第5区第3層から出土したもので、2は、長径9.5cm、短径7.5cm、厚さ4.8cmの楕円形をなす。両面とも中央部はよく磨かれており磨石として使用されたものとみられるが、下端部には敲打痕が残るので叩石としても使われたのであろう。3は、長径9.2cm、短径8.3cm、厚さ4.8cmの略円形である。両面ともよく研磨されており、中央部は平坦となっている。出土地点は繩文土器と同じであり、繩文後期のものとみてよかろう。このほか黒曜石（隠岐産）や流紋岩製の石屑が数点出土している。



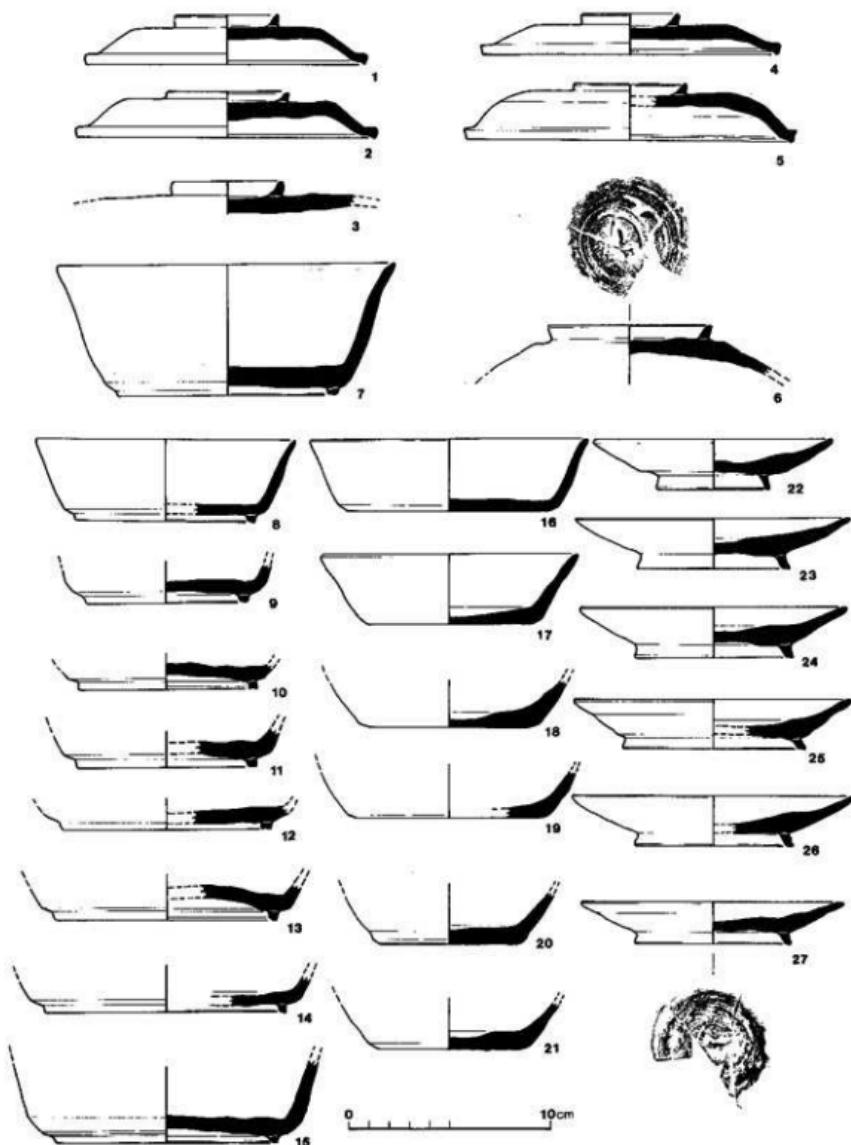
第8図 ロクロ谷遺跡出土土器実測図

b. 奈良～平安時代の遺物

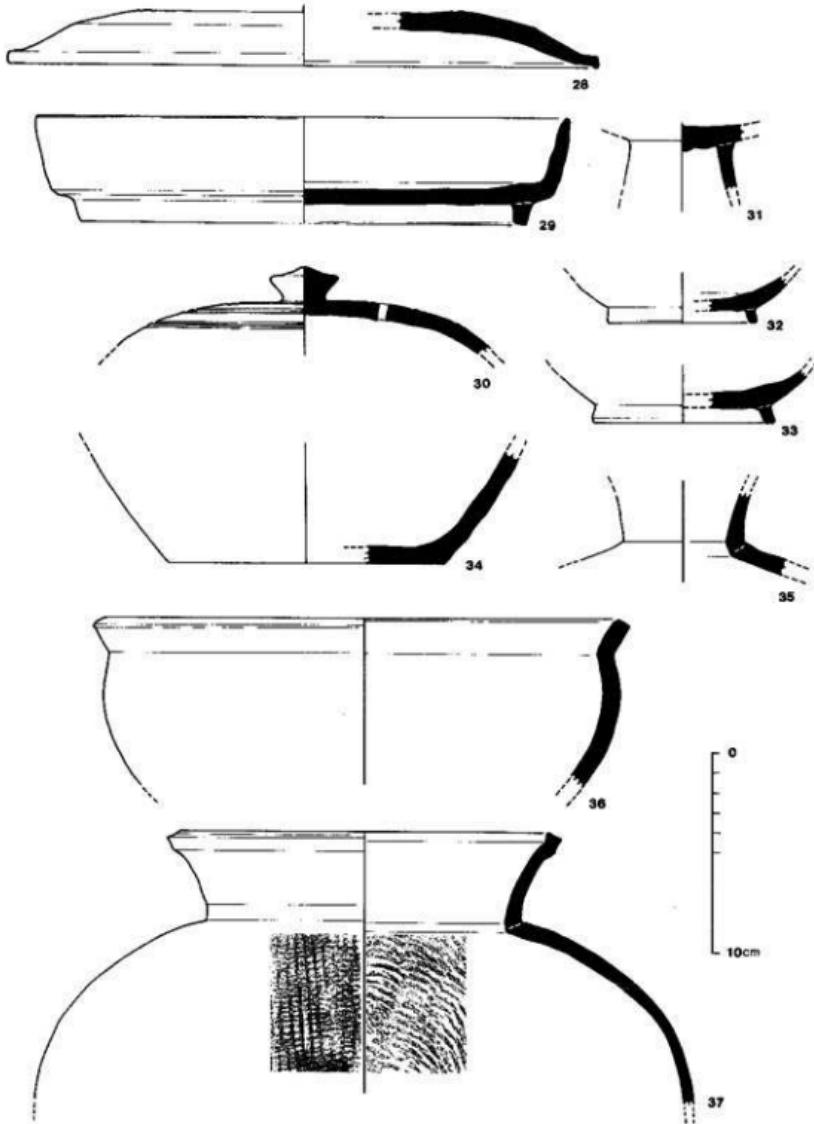
土師器（第8図）　浅い埋没谷部分の第2層を中心に出土しており図示したものは菱形土器のみであるが、ほかに皿や壺の破片と考えられるものが少量ある。蓋は復元口径15～17cmの小型のものと21～29cmの大型の2種がある。形態、調整などはほぼ共通するが、頸部が短かく口縁部がゆるやかに外反するもの（1・2・3）と頸部が長く口縁部がくの字に外反するもの（4～8）とがある。口縁端部は丸くおさめている。1のように端部を少しつまみあげているものもある。胴部の張りは小さく胴部最大径が口径をこえるものはないようである。頸部の調整は内外面ともハケ目調整であるが、横位のカキ目状調整のほどこされているもの（1・5）もみられる。胴部上半外面は縦方向のハケ目を主体とし、一部にはヘラミガキ調整（6）のものもある。下半は縦・横位のハケ目調整である。胴部内面は斜めもしくは横方向のヘラケズリ調整で平滑に仕上げられている。全体に赤茶色～茶灰色を呈し、胎土に砂粒をかなり含んでいる。外面に煤が付着しているものもみられる。

須恵器（第9・10図）　土師器と同様に第2層を中心に出土しており、蓋、壺、皿、高杯、壺、鉢などがある。蓋Aは、口径14～16cm、高さ2～3cmの大きさで頂部から縁部にかけてロクロで平らに削り、その中央に外傾する輪状のつまみをつけたもの（1～5）。口縁端部はやや屈曲して外面に平坦部をもっている。蓋B（6）は、高さが高く、輪状つまみの径が大きいもので、内側にヘラ切りの痕跡をとどめている。つまみの周辺はヘラ削り調整である。蓋Cは、頂部が丸く中央に宝珠状のつまみをつけたもの（30）。頂部から縁部にかけて2条単位の沈線がめぐり、頂部端の4か所に孔が穿たれている。直径20cm内外の大型の蓋である。28は頂部を欠損するが、おそらくは中央に宝珠状のみまみをもつものであろう。器高は低く、大型の蓋である。

壺Aは口径13～17cm、高さ4～6.5cmで、底部の外縁のやや内側に直立する低い高台がつくもの（7～15）。体部は直線的にゆるやかに外傾し口縁部はやや屈曲する。端部は薄く尖り気味である。底部はヘラで切りはなし、その上をナデ消しており凹面となるものが多い。高台下端は平坦になっているが、接地面は、高台の外縁となるものが大半である。底部と体部はにぶい稜角をなしている。壺Bは、口径13～14cm、高さ3.5cm内外で底部はヘラ削りでその上をナデて仕上げているものが多い。体部は外傾し、端部は丸く仕上げている（16～21）。内外面ともロクロによるミズヒキ痕がよく残っている。皿は、口径12～14cm、高さ2～2.5cmで、底には外傾する環状の高台がついている（22～27）。底部はヘラ切りで平坦に切りはなし、外縁に高さ5～8mm、厚さ5mm内外の高台をつけている。下



第9図 ロクロ谷遺跡出土須恵器実測図(1)



第10図 ロクロ谷遺跡出土須恵器実測図(2)

端は平坦で、接地面は外側である。内外面にはロクロビキの痕跡をよくとどめている。底部と体部の境付近の器壁は厚くなっている。この土器は器形的に類例は少ないが、高台の径が大きく、環状にはりつけた高台も蓋の輪状つまみとは明らかに異なる特徴をもっている。口縁端部も蓋とは違っているので皿と考えるのが妥当であろう。

壺、蓋、皿以外の器種としては、台付盤（29）、高壺（31）、壺（32～35・37）、鉢（36）などがある。29は、口径 26.8 cm、高さ 5.3 cm の大型の盤で、底部外縁の少し内側に直立する高台がついている。体部はほぼ垂直に立ちあがり、端部は丸くおさめている。立ちあがりと底部の境は稜をなす。底部はヘラ切りとみられるが、その上をナデ消している。内外面にロクロミズビキの痕跡をよく残す。高壺は脚部上端の破片で直径 5 cm で粘土紐まきあげとロクロビキの痕跡をとどめている。壺は、底部の形態から 2 種に分けられる。壺 A（34）は、底はロクロで平らに削ったもので外面には自然軸がかかっている。壺 B（32・33）は、底部の外縁に外傾する高台がつくものである。壺の上半部はよくわからないが、32・33は35などの長頸壺の底部であろう。壺 C（37）は、口径 18.7 cm、頸部径 16 cm、胴部最大径 33 cm 内外の大型の壺である。口縁端部は、内側上方に少しつまみがあげられている。口頸部内外面はロクロビキの痕跡をとどめている。また、胴部外面には格子目状の叩き調整痕、内面には同心円状の叩き目がよく残っている。鉢（36）は口径 25.8 cm、高さ 12 cm 前後の大きさがある。口縁部はくの字状に外傾し、端部は平らに仕上げている。

以上述べたように、本遺跡出土の歴史時代の土器には土師器と須恵器があった。このうち須恵器は、蓋、壺、皿を主たる器種としている。蓋では器高が低く、頂部に輪状のつまみをもち、口縁端部にかえりのみられないものを特徴としている。壺では高台付のものと平底のものとがあり、高台付のものは、底部の外縁の少し内側に直立する低い高台がついている。いずれも体部は直線的に立ちあがっている。

島根県西部地方（石見）における歴史時代の須恵器の編年については、いまなお明確にされていないけれども出雲地方の編年から推測すると本遺跡出土の須恵器は、大まかには 8 世紀後半～9 世紀代の時期と推定される。

IV. まとめ

今回のロクロ谷遺跡の調査は、町道の改良工事に伴う緊急発掘調査として実施した。遺跡は、昭和45年ごろに行われた現道の拡幅工事の際に土師器、須恵器片が採集されたことから、その所在が明らかになっていたのであるが、今回の大規模な道路改良工事によって遺跡が消滅する恐れが出たため緊急に調査を行ったものである。遺跡の性格や遺物包含層の広がりなどが不明であったので本調査に先立って試掘調査が行われた。⁽¹⁾その結果住居跡などの存在する可能性が高いとされた。

今回の調査は、試掘調査の結果をもとに道路建設予定地域の約400m²を対象として行った。調査により土師器、須恵器片などはかなりの量出土したが、遺構は検出されなかった。遺物の出土状況からみて、遺物はロクロ谷の上手からの流れ込みと考えられたので、道路予定地の外側に何らかの遺構があるものと推定された。つぎに今回の調査で得られた結果についてまとめておきたい。

1. 遺跡の立地など

ロクロ谷遺跡は、町道鷲渕馬野原線の出羽峠を越えて馬野原側へ約300m下ったところに位置する。現地は、通称ロクロ谷と呼ばれる西から東へのびる小さな谷の谷尻部の北側で、西から東へのびる丘陵の東南側山裾部に位置している。20×20mほどの小さな平坦部が形成されているが、平坦部は調査区域のほぼ中央を境に2つの平坦部に分かれている。その境には石列がみられるので後世に水田・畑地化といった地形の変化が行われたと考えられる。第2区と第5区の東半部では表土層の下に水田・畑の耕作土が堆積していることはこのことを裏付けるものであろう。また、第1区と第2区の南半部では、角礫を多く含む褐色土層や砂礫層が互層になっている。谷に面していることから自然の營力による堆積土であるとみてよい。さらに、調査区のほぼ中央（第1区と第4区の境から第2区と第5区の境付近）では西から東へ続く浅い埋没谷が検出されている。この部分では第3層も厚く堆積しており、埋没谷内の埋土は周囲からの流出土と考えられる。したがって、ロクロ谷遺跡の遺物包含層はロクロ谷からの流出土（角礫層、砂礫層）と丘陵上手からの流出土で形成された平坦部上に営まれているといえる。

歴史時代の遺物は、表土の下の暗褐色土層を中心に包含されているが、表土層に浮きあがった状態で出土しているものもかなり存在する。第3層には含まれていないが、この層

には、縄文時代の遺物が断片的に含まれている。歴史時代の遺物は、須恵器、土師器があり、その大半は須恵器である。完形品ではなく全て破片である。また、器面が磨滅しているものや意図的に破碎されているものもかなり存在する。このような遺物の出土状況からみて遺跡の西側、谷の上手側に須恵器焼成の窯跡とそれに関連する住居跡などが存在すると考えられる。

すでに述べてきたようにロクロ谷遺跡の周辺には、道ヶ谷窯跡、コオギヤスミ窯跡、矢ヶ谷窯跡、桜ヶ谷窯跡など20基ちかくに及ぶ窯跡が分布して久永古窯跡群を形成している。⁽²⁾ロクロ谷遺跡は、この久永古窯群のはば中央に位置しており、また、ロクロ谷と呼ばれる地名から考えても、付近に窯跡の存在する可能性が強い。

2. 出土の遺物について

今回の調査では縄文時代と歴史時代の遺物が出土した。

縄文時代の遺物は、上器と石器である。第3層の出土である。土器は表面に磨消縄文のほどこされた鉢形土器で、横走する細い沈線の間に貝殻による擬似縄文がほどこされている。頸部下の縄文帯には擬縄文の上に交差する斜格子の短線がほどこされている。部分的に沈線の集約するところがあり、そこには渦文がほどこされているらしい。器壁や文様の特徴から瀬戸内地方の彦崎KⅡ式土器や近畿の元住吉山式土器、山陰の権現山式土器と共に縄文後期後半の土器と推定される。磨石はいずれも長径9cm、短径8cm、厚さ5cm内外の大きさがあり両面とも中央部はよく磨かれている。下端部に敲打痕の残るものがあり叩き石としても使ったらしい。土器に伴出しており、縄文後期のものである。遺跡の近くに仮泊地的な場があったのかもしれない。

歴史時代の遺物のうち須恵器では、蓋、坏を中心、皿、高坏、壺などがある。蓋Aは器高が低く、頂部には輪状のつまみをもつ。口縁内側にはかえりがなくやや平坦となる。頂部はヘラで平らに削り、その中央につまみがつく。つまみは外傾し、端部は鋭く仕上げている。つまみの内、外側のナデ調整も丁寧である。蓋Bは、器高が高く、頂部をヘラで切りはなしたもので、輪状つまみの端部が丸くなっている。坏では、高台付のもの(A)と無高台のもの(B)がある。坏Aは、底部の外縁のやや内側に直立する低い高台がつき体部は直線的にゆるやかに外傾する。底部はヘラで切りはなし、その上を丁寧にナデで調整する。体部と底部の境は稜角をなしている。坏Bは、口径13~14cmで底部はヘラで削りその上をナデで仕上げている。体部はゆるやかに外傾し、口縁端部は丸くなっている。

つぎにロクロ谷遺跡出土の須恵器の製作された時期について検討してみよう。歴史時代

の須恵器については、石見地方でも近年になって大田市白坏遺跡や浜田市石見国分寺跡など実年代を知る良好な資料が出土しているが、いまなお出土資料が少なく編年は今後の課題である。一方、出雲地方にあっては、松江市出雲国府跡出土の一括資料をはじめ松江市⁽⁴⁾狐谷横穴墓群、安来市高広遺跡、松江市出雲国府跡、松江市池ノ奥遺跡などから多くの出土例があり、古墳時代から歴史時代への須恵器の変遷がほぼ確立している。蓋は、輪状つまみの消失と擬宝珠状つまみの出現や口縁端部の形態、内側の身受け（かえり）の消失など、また、坏は、高台付のものでは高台の形態や貼りつけられる位置、体部の立ちあがりの形態などが型式分類の大きな要素となっている。また、底部の切りはなし方法や調整技法も大きな要素となっている。

歴史時代須恵器を5型式に分類した柳浦俊一氏によると第2式の高台付坏では、高台がやや低く、直立気味になり、体部が内湾し、椀形になり、蓋では端部のかえりがなくなり、ほとんどの場合輪状つまみをもっているものをあげている。第3式は、高台付坏は、低い直立する高台が底部外縁のやや内側につき、体部が直線的に立ちあがるもの。蓋は、器高が低くなり、扁平な形のもので、つまみは輪状のものが少くなり、擬宝珠状のものが多くなるものを含めている。そしてこの時期から底部切りはなしに糸切り手法が出現している。第4式では、高台付坏は、高台が底部外縁につくようになり、蓋は、頂部と縁部の境が明瞭で、口縁端部がやや屈曲して平坦となるものをあげている。底部は糸切りで切りはなし、その痕を調整しないものとしている。⁽¹²⁾

高広遺跡出土須恵器は9期に分類されており、ⅢB期は、蓋、坏が大型化し、蓋ではかえりのあるもののほか、かえりがなく口縁部が短く直立するものが出現し、坏では体部がやや直線的に立ちあがるものとしている。切りはなし方法として静止糸切り法が出現する時期である。つきのⅣA期になると蓋は器高が低くなり、端部がやや平坦で短く、つまみは擬宝珠状のもののみとなり、口縁内側のかえりもみられなくなる。坏の高台のつくものは、高さが高くなり、高台は底部外縁のやや内側につくようになる。この時期には高台のつかない坏や皿、高台付皿が出現し、底部の切りはなしに回転糸切りが採用されるという。ⅣB期は、蓋は、扁平となり、つまみは擬宝珠状のものだけとなり、口縁端部が屈曲して平坦となる。高台付坏では高台が底部外縁につくようになり、体部も直線的に立ちあがるもののが中心となる。

また、狐谷横穴墓群の土器をみるとⅠ式からⅤ式に分類されている。このうちⅣ式は、蓋の口縁内側にかえりがなくなり、口縁部が直立し、ロクロ削りで平坦にした頂部に輪状

つまみがつくもの。壺では高台が底部のやや内側につき直立するものを含めている。つぎのV式は、底部に糸切りの手法が出現する時期で、蓋は平坦となり、端部が短く直立し、壺では、高台が底部外縁の内側につき、体部が直線的に立ちあがるものをあげている。

さらに、出雲国跡出土須恵器については5形式に区分されている。第2形式の高台付壺は、底部のやや内側に直立する低い高台をつけ、体部が外傾するもの。蓋は、輪状と擬宝珠状のつまみをもつものがある。口縁端部も短く直立するものと断面三角形にちかいものがありかえりはみられなくなる。第3形式は底部の切りはなしに糸切り法が出現する時期で、高台付壺は、底部の内側に外傾する高台がつき、体部が外傾するもの。蓋は頂部をロクロ削りで平坦にして、扁平な擬宝珠状つまみをつけるものを含めている。第4形式の高台付壺は、底部の外縁に低い高台をつけ、体部は直線的に外傾するもの。蓋は器高が低く扁平となり、口縁端部が短く直立するもののはか平坦となるものとがみられる。

以上出雲地方の歴史時代の須恵器の編年の一節についてみてきた。遺跡ごとに蓋のつまみの形態や口縁部の形状などに違いがみとめられるけれども大まかには蓋では輪状つまみから宝珠状つまみのもの。かえりのあるものからないもの。口縁端部が直立するものから屈曲して平坦なもの。高さの高いものから扁平なものへと変化している。また、壺のうち高台付のものでは、高台が高く、外傾してしっかりしたものから短くて直立するもの。そして低くて直立する高台が底部外縁の少し内側につくものから外縁につくもの。体部では内湾気味に立ちあがるものから直線的に外傾するものへ推移している。高台のつかないものでも体部は内湾するものから直線的なものへ変化している。さらには、底部切りはなしの方法がヘラ切りから糸切りへ変化していることも大きな特徴といえる。

いま、それぞれの論考、報告書からこれらの須恵器の実年代をみてみると柳浦編年第2式、高広ⅢB期、孤谷Ⅳ式、出雲国跡第2形式が7世紀末～8世紀前半に比定され、底部切りはなしに糸切り手法の出現する柳浦編年第3式、高広ⅣA期、孤谷Ⅴ式、出雲国跡第3形式は8世紀中葉～後半、そして蓋が扁平でつまみが擬宝珠状のもののみとなり、高台付壺の高台が底部外縁につき、体部が直線的に立ちあがるものを特徴とする柳浦編年第4式、高広ⅣB期、出雲国跡第4形式が8世紀末以降に比定されている。¹³

こうした出雲地方の編年をロクロ谷遺跡出土の土器に対応させてみると、底部切りはなしに糸切りがみられず、蓋では、輪状つまみのものが主体であるところは柳浦編年第2式、高広ⅢB期、出雲国跡第2形式と共に通するが、口縁部内側にかえりがなく、端部が平坦になる器形は高広ⅣB期、出雲国跡第4形式にちかい。また、高台付壺で高台が底部外縁の

少し内側につき、高台も低く直立し、しかも体部が直線的に立ちあがる特徴は高広 IVB期出雲国庁第4形式に共通する。しかし、底部を切りはなしの後、周辺を丁寧にナデ調整している手法は、柳浦氏の第3式に相当する。このようにみると本遺跡の土器編年に出雲地方の編年をそのまま対比させることは困難であることがわかる。

ところで出雲地方では底部切りはなしに糸切り手法が出現するのは他地方に比べてかなり早く8世紀中葉前後と推定されているが⁽¹⁴⁾、石見地方ではかなり遅くなつてからのようにある。⁽¹⁵⁾石見地方での糸切りの出現する時期はいまなお特定できないが、大田市白坏遺跡では伴出の紀年銘ある木簡から9世紀末ないし10世紀初めの糸切りのある須恵器が出土している。蓋では輪状つまみをもつものが多く、口縁端部はやや平坦となるものが中心である。坏は、高台付坏と高台のないものとに分かれ、高台付では、底部の外縁の少し内側に低い直立する高台がつき、体部は直線的に立ちあがっている。高台のつかない坏も体部は直線的に外傾し、底部は糸切りである。器形的にみてロクロ谷遺跡出土土器に近いが底部に糸切り手法がみられる点でロクロ谷遺跡出土土器より新しい時期のものといえる。⁽¹⁶⁾

以上、ロクロ谷遺跡出土の須恵器の生産の時期を中心にしてきた。先述したように、石見地方における歴史時代の須恵器の編年が確立されていない状況では、実年代を特定するだけの手懸りはまだないが、ロクロ谷遺跡出土土器の器形や調整の特徴、さらには白坏遺跡出土上器との比較からみて、本遺跡出土須恵器は8世紀後半から9世紀後半ごろに製作されたものと推定することができる。

今回の調査は、町道改良工事に伴う緊急調査として実施したものであった。調査開始前には集落跡などの遺構が発見されることも予想されたが、調査の結果は、遺構は検出されなかつたので工事の着手もやむをえないとした。今後は瑞穂町周辺の歴史時代の土器の研究を進め、その編年的位置について明らかにしていくことが必要である。

注

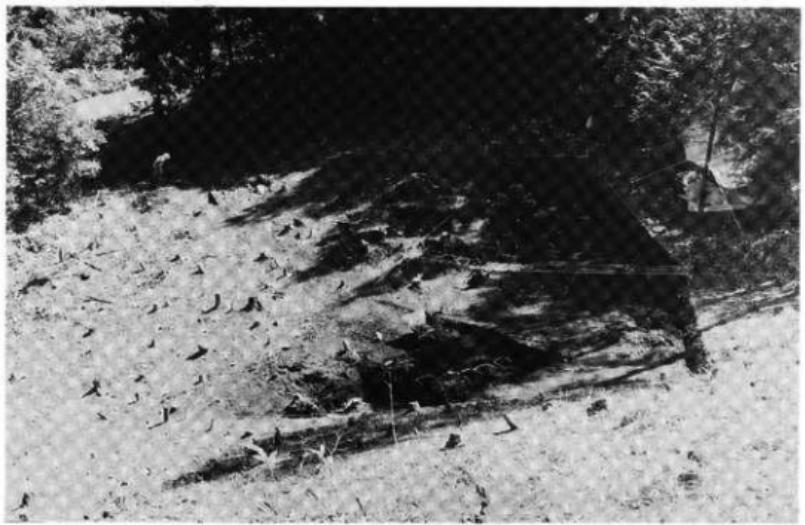
- (1) 吉川 正「ロクロ谷遺跡試掘調査報告書」瑞穂町教育委員会 1987年。
- (2) 吉川 正「瑞穂町の遺跡」「瑞穂町誌」第3集、瑞穂町 1976年。
- (3) 佐々木謙・小林行雄「出雲国森山村崎ケ鼻洞窟及び櫛現山洞窟遺跡」「考古学」第8巻、第10号 1937年。
- (4) 大国晴雄・遠藤浩巳編「白坏遺跡発掘調査概報」島根県大田市教育委員会 1989年。

- (5) 卜部吉博「石見国分寺跡発掘調査概報」浜田市教育委員会『季刊文化財』第58号 1987年。
- (6) 町田 章編『出雲国庁跡発掘調査概報』松江市教育委員会 1970年。
- (7) 横山純夫編「狐谷横穴群」「島根県埋蔵文化財調査報告書」第VII集 島根県教育委員会 1977年。
- (8) 足立克己ほか「高広遺跡群発掘調査報告書」島根県教育委員会 1984年。
- (9) 島根県教育委員会『史跡山陰国府跡—環境整備報告書一』 1985年。
- (10) 岡崎雄二郎ほか「鉢田遺跡、朝鈞荒神谷遺跡、イガラビ遺跡、イガラビ古墳群、池ノ奥古墳群、池ノ奥C、D遺跡、池ノ奥A遺跡、池ノ奥窯跡群」 松江市、松江市教育委員会 1990年。
- (11) 山陰地方の須恵器の編年は山本清氏によって着手された。山本氏の編年は古墳時代の須恵器を中心に分類編年（I～IV期）されたもので歴史時代の須恵器については資料的制約もあり大きくIV期にまとめている。
山本 清「山陰の須恵器」（『島根大学10周年記念論文集』 1960年。 山本 清『山陰古墳文化の研究』 1971年に再録）。
- (12) 柳浦俊一「山陰地方における歴史時代須恵器の編年試論」『松江考古』第3号 1980年。
- (13) ここで述べた須恵器は、陶邑編年に対比するとIV型式に含まれる。
- (14) 前掲注(12)文献。
- (15) 瑞穂町の久永古窯跡群出土須恵器でも底部はヘラ切りである。また、石見国分寺跡出土例もヘラ切りが多く、時代のやや下るとみられる皿には糸切りがみられる。
前掲注(2)及び(5)文献。
- (16) 延喜9年(909)の墨書きがある。
- (17) 白坏遺跡出土土器から推測すると石見地方で糸切り手法が出現するのは、いまのところ9世紀後半ごろのようである。

図版第1



a. ロクロ谷遺跡遠景

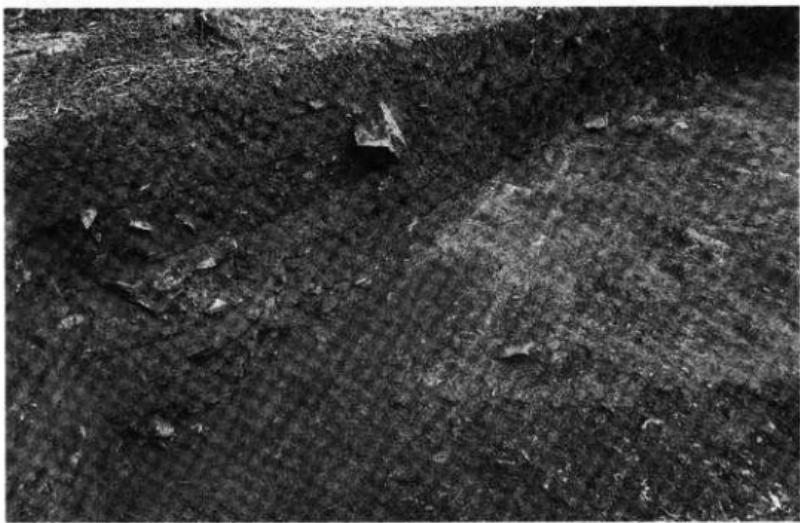


b. ロクロ谷遺跡近景

図版第 2

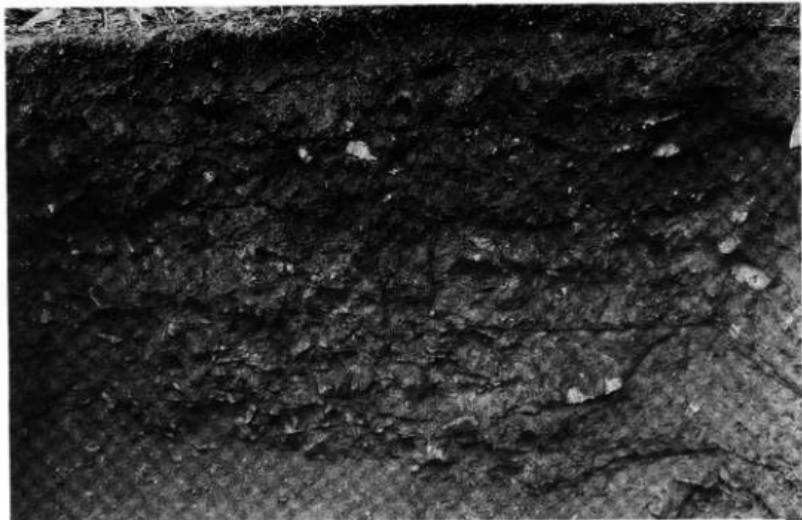


a. 調査区全景

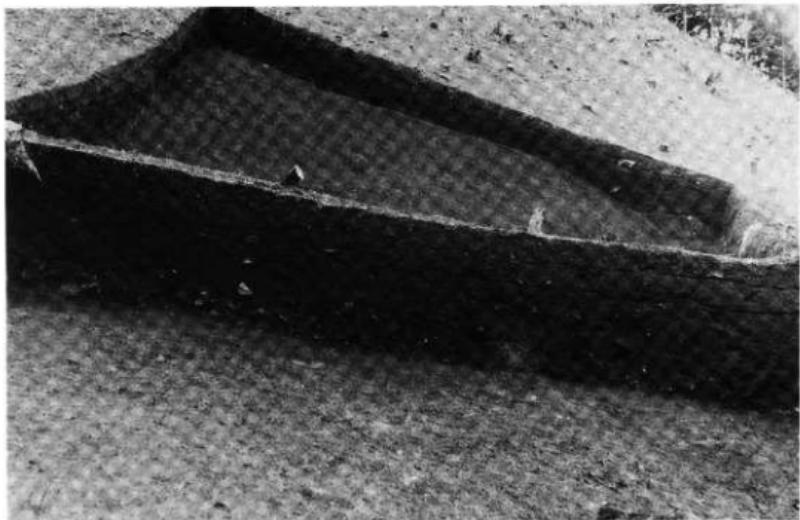


b. 第 1 区西壁断面

图版第 3

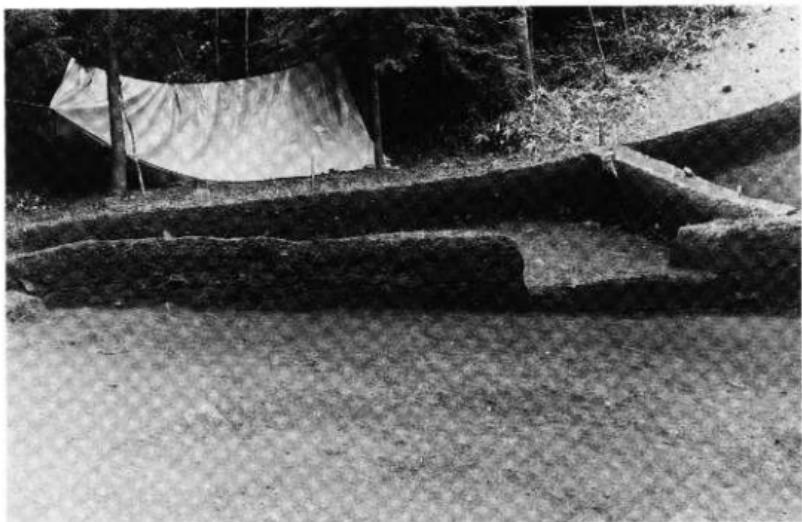


a. 第 1 区南壁断面

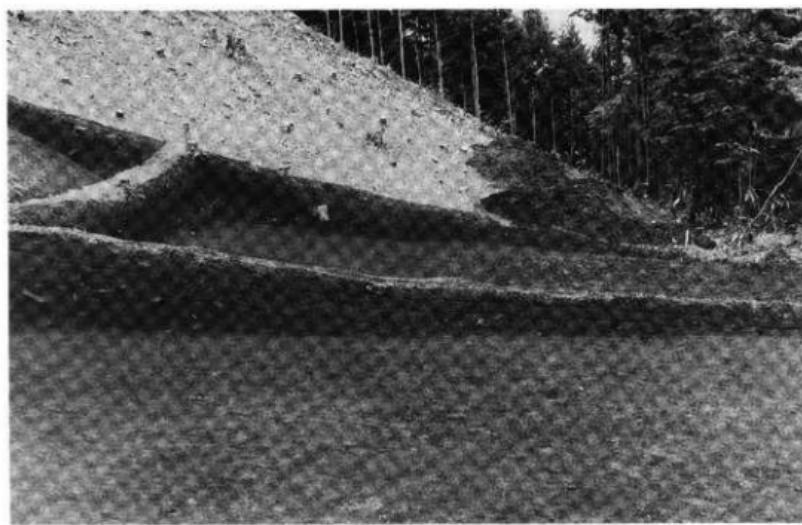


b. 第 1 区北壁断面

図版第4



a. 第2区西壁断面

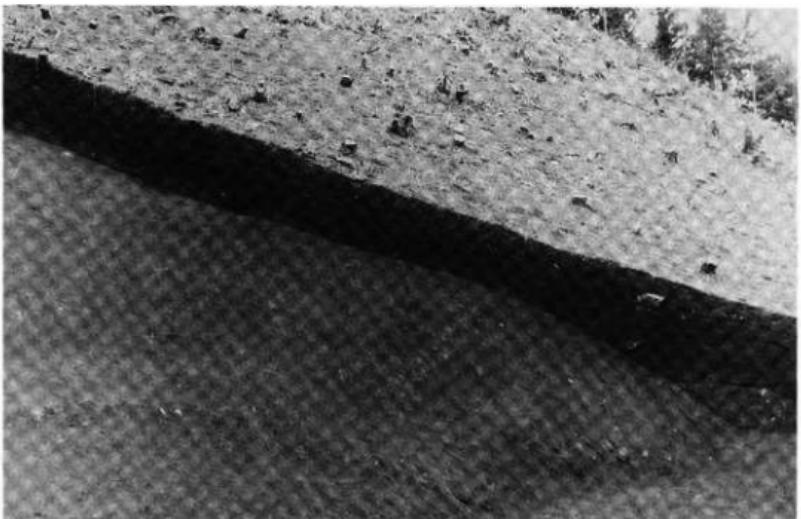


b. 第2区北壁断面

図版第5



a. 第4区西壁断面



b. 第4区北壁断面

図版第 6



a. 第 5 区西壁断面



b. 第 5 区北壁断面

図版第7



a. 繩文土器

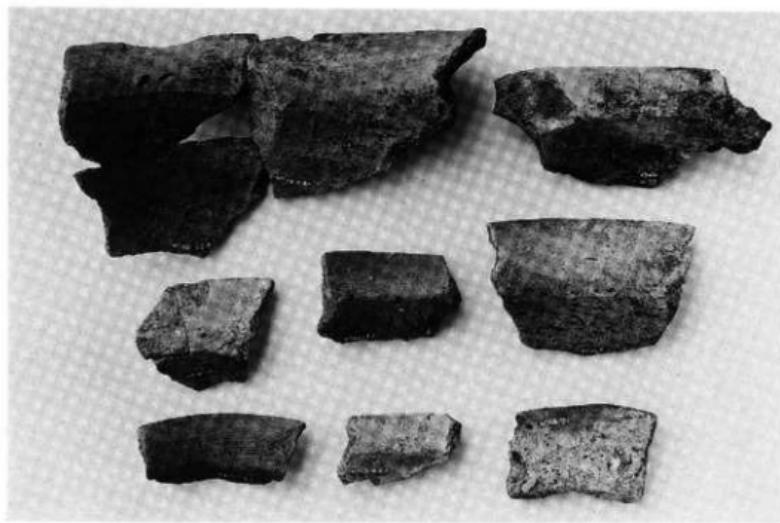


b. 磨石

圖版第 8

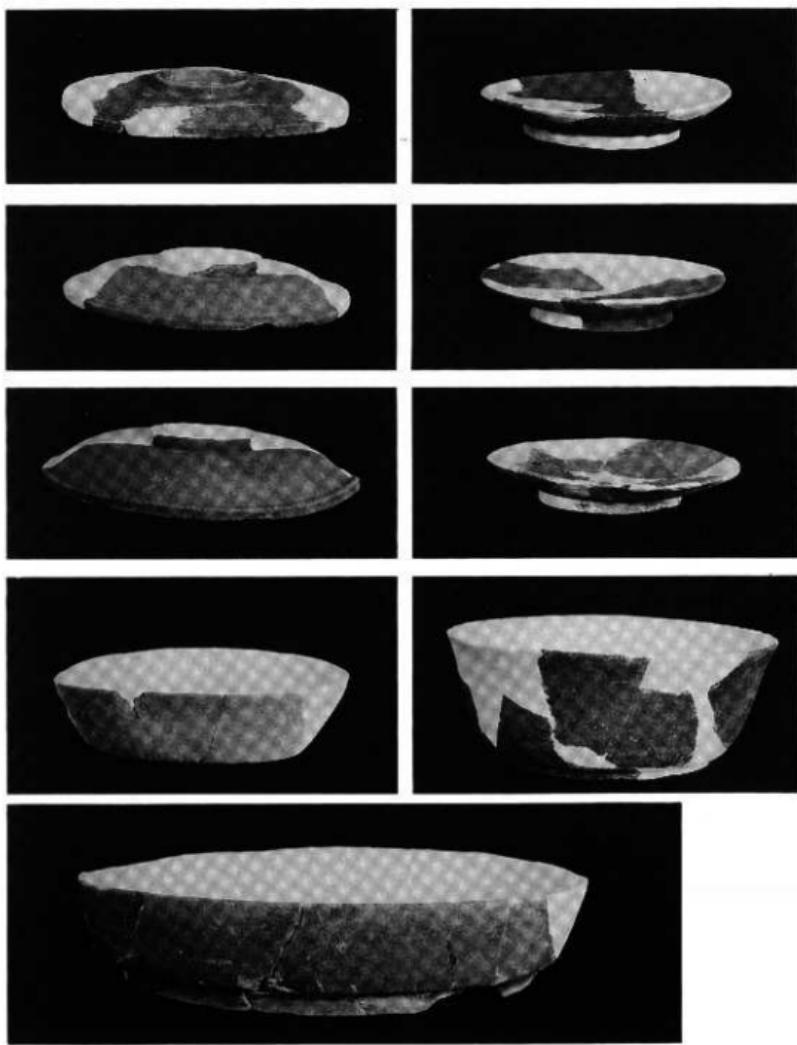


a. 土師器 (外面)



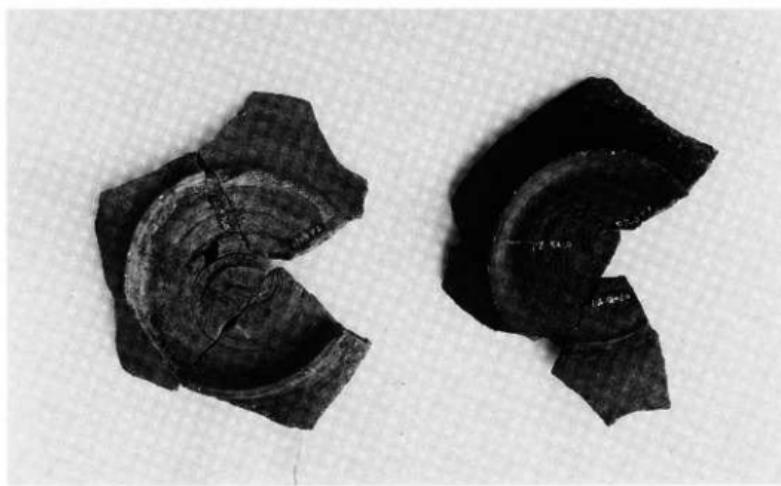
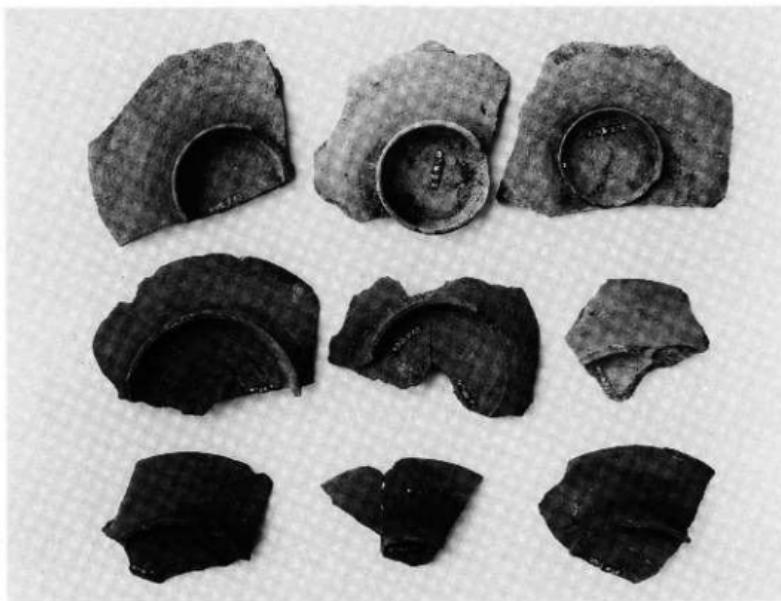
b. 土師器 (内面)

図版第9



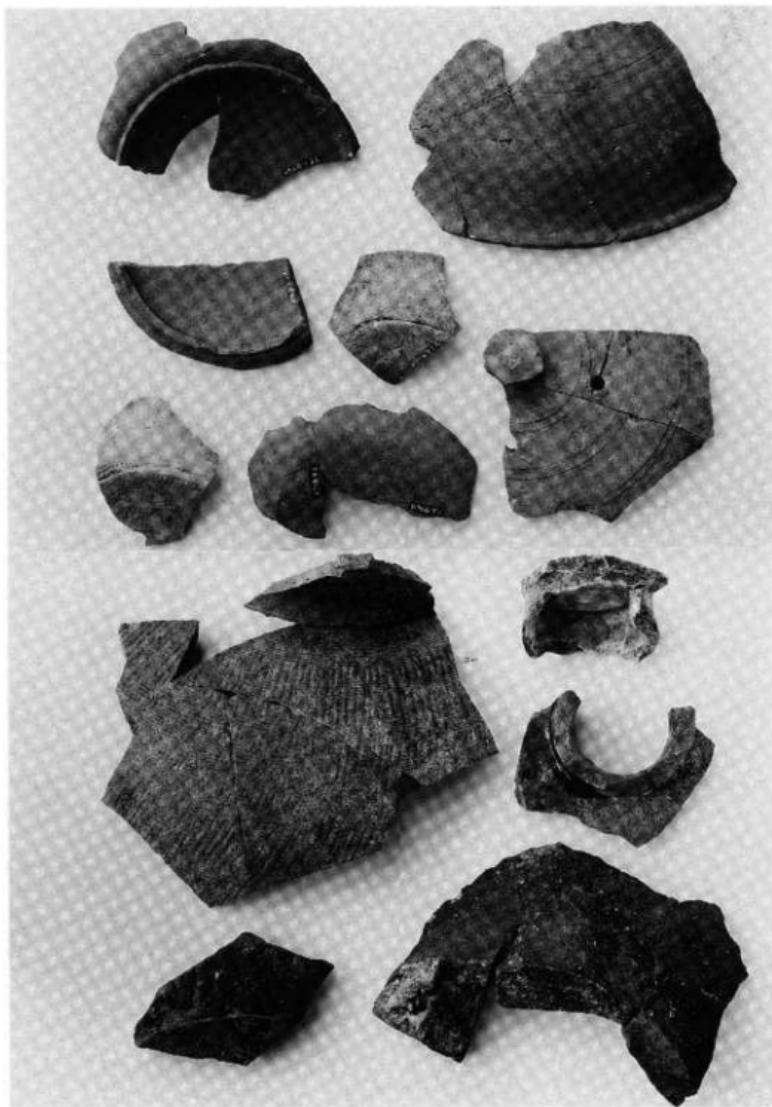
須恵器（1）

図版第10



須恵器（2）

図版第11



須恵器（3）

1990（平成2）年3月

鳥根県邑智郡瑞穂町
ロクロ谷遺跡発掘調査概報

編集 河瀬正利
発行 瑞穂町教育委員会
印刷 柏村印刷株式会社